妹から学んだ嬉しいの種類

出雲市立斐川西中学校　二年　　菖蒲智己

妹はディスレクシアという学習障害に限りなく近い小学二年生です。ディスレクシアとは読むことに困難がある障害のことです。その妹が小学校に入る前から読める字がないことに僕は違和感を抱いていました。ですが、いずれ読めるようになるだろうと思っていました。しかし、小学校に入ってからの妹はひらがなやカタカナはおろか、一桁の数字すらも読めません。皆さんは、小学校になるまでに「とり」など短い単語は読むことができたと思います。しかし、妹は鳥がどんな動物であるかは知っていますが、「とり」という文字を読むことはできませんでした。妹にどんな風に文字が見えているのか聞いたところ、文字が揺れ動いたり、何かの暗号のように見えたりするようです。数字は「６」と「９」を間違えたり、「は」と「ば」を間違えたりするなど、基本的にどんな文字も読み間違えました。皆さんにそのような経験があるでしょうか。

それから、妹は読み間違いが続いて涙を流しました。周囲の友達や他の人が出来るのに、自分だけができない。その時、妹はどのような感情を抱いていたのでしょう。僕に分かるはずもありません。しかし、妹は間違えを繰り返しながらも、一生懸命に努力し続けました。僕は、妹の姿を見て、自分がどれだけ恵まれているのかと感じました。それと同時に、自分が見えている世界が全員見えているわけではないと気づきました。なぜなら、妹は一生懸命に文字を読もうとしているのに対し、僕は難なく読めていたからです。妹と代わってあげられるなら代わりたい。しかし、それはできません。それならば、妹が努力する時間分、僕が妹を支える。それが代わってあげることができない兄としてのせめてもの支援ではないかと考えました。そこから僕は、妹の障害を改善するための勉強を手伝うことにしました。

努力した妹は、徐々にみんなと同じくらい読み書きができるようになりました。妹は文字を読むことができるようになってから、自分の読める文字を見つけたら声に出して読んでいます。妹が文字を読めるようになったことがとても「嬉しい」と感じました。

僕は、努力する妹を支える経験を通じて、自分が恵まれていると知りました。また、人の目標を手助けすることで感じる「嬉しい」という感情は、自分が何かを達成した時に感じる「嬉しい」とは違う感情でした。僕は、このことがきっかけで、何か人が行き詰まっている時に、少しでもその人の役に立てるように行動するという行動理念ができました。

僕は、これからも妹のように困っている人に対して、何か自分にできることはないか考えて手助けをしていきます。また、僕の妹がそうだったように、障害というのはこれから社会から切り離せないものです。みなさんは、何十年と人生を歩んでいく上で、妹のような人と絶対に会わないということはないと思います。もし、これから先、妹のような人々や障害のある方に出会い、困っていたとしたら手助けをしてみてはどうでしょうか。

少しでもこの作文を読んで、様々な場面で障害のある方を支援する人が増え、障害に興味をもってくれたら嬉しいです。